

多摩川の名脇役

人々の生活と寄り添ってきた

9. 多摩川旧堤と陸閘（東京都世田谷区玉川～上野毛付近）

二子玉川駅から少し足を伸ばすと道路と平行に芝生の小山が続き、その堤防を通る煉瓦の通路からは多摩川が見えます。

この芝生の小山が大正から昭和にかけて築かれた堤防で、2箇所にある煉瓦づくりの通路のようなものが陸閘（りっこう）です。

今回は、この地域と、人々の生活に寄り添ってできた堤防と陸閘の歴史をたぐります。



（左から時計回りに）

陸閘から見える多摩川／道路沿いに続く堤防／玉川東陸閘／二子橋と東急田園都市線／二子橋水質観測所[*1]（写真-H17.1撮影）

江戸から伸びる街道

慶長5(1600)年、天下分け目の戦いと言われる関ヶ原の戦いに勝利した徳川家康は、京都から江戸へ都を移しました。

家康は江戸に幕府を開くとすぐに、京都から青山辺りまで通じていた東海道を江戸のまちまで延ばし、平川（現日本橋川）にぶつかる地点に大きな橋をかけました。

この橋は「日本橋」と名付けられ、ここを出発点として数々の街道が伸びていきます。

そしてそのいくつかの街道が多摩川を渡るため、東海道の「六郷の渡し」、中原街道の「丸子の渡し」、矢倉沢往還（大山街道）の「二子の渡し」、津久井街道の「登戸の渡し」、鎌倉街道の「関戸の渡し」などの渡船場が設けられました。



宿場の発達

"あばれ川"と呼ばれた多摩川への架橋が難しかった事から、渡河には船が利用されました。増水のため川越えを禁じる「川留め（川止め）」も度々あり、旅人にとっては難所の一つでした。しかし足止めをくった旅人が滞在するため、渡し近くの村々は宿場として栄えていきました。

寛文9(1669)年、「二子の渡し」のすぐ側にある溝口・二子村の両村も「矢倉沢往還」の宿場に定められました。次の宿場へと荷を運ぶ人足2人と馬1匹が備えられ、月の初めの20日間を溝口村、残りの10日を二子村が交替で勤めていたそうです。

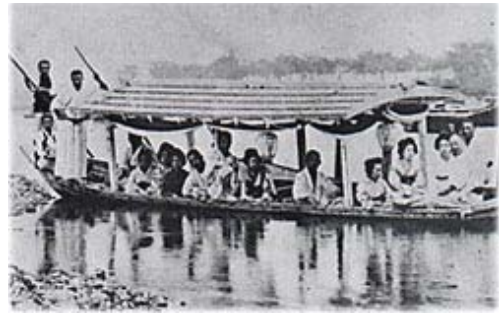
「矢倉沢往還」は、神奈川県南足柄市の矢倉沢方面から物資を運ぶみちでしたが、霊峰大山への登山口でもあったため「大山道」とも呼ばれました。

江戸時代、博打と商売にご利益があるとされた「大山詣り」は大流行し、道中の溝口・二子宿には、旅籠、居酒屋、煮売り、髪結、棒屋、鮎商、湯屋、穀屋、太物屋、青物屋、鍋釜鉄瓶屋・経師屋、豆腐屋、材木屋、荒物屋、瀬戸物屋[*2]などが軒を揃え、大いに賑わったと伝わっています。

またこの時代、江戸に近く幕府献上用としても好まれた鮎漁も盛んに行われ、宝暦3(1753)年には將軍家重も二子村で鵜飼いによる川狩りを行ったという記録が残っています。

宿場まちから行楽地へ

慶応3(1867)年、大政奉還によって長い幕府政治が終わり、新しい時代が幕をあけます。新政府による改革によって宿場や上納鮎制度も廃止されました。



明治40(1907)年になると、渋谷から二子村対岸の玉川村まで玉川電気鉄道が延び、一時賑わいが影をひそめた二子の渡し周辺は、再び行楽地として注目を集めます。

近郊の人々はこぞって多摩川を訪れ、旅館に泊まって田園風景や多摩川の風情を眺めたり、屋形船で鵜飼いを楽しみながら川魚を賞味して余暇を過ごしました。

「日本職業別明細図」には、大山街道付近の川辺には、中屋・喜望館・柳屋・水光亭・日の出屋・玉子屋・玉泉亭などの旅館が建ち並び、鮎漁・鮎料理の月乃家・富玉、鮎寿司を看板にしている三州亭などの店々が軒をつらねた様子が記録されています。

治水と生活のための陸閘

行楽地として賑わう反面、下流部に位置し、東京と神奈川両府県にまたがるため断続的な堤防しかないこの辺りは、古くから水害に苦しめられていました。

大正3(1914)年8月9日、多摩川を襲った2度の大洪水が発端となって起きた「アミガサ事件[*3]」を契機に、国の直轄による「多摩川改修工事」が行われる事になりました。

大正7(1918)年から竣工され、昭和8(1933)年度に完了した工事の対象区間は、河口から二子の渡しの少し上流までの約22kmです。

現在残る世田谷区玉川1丁目から上野毛2丁目付近の堤防もこの時築かれますが、川辺に建ち並ぶ料亭などから「眺めが悪くなる」として合意が得られず、堤防と川の間を料亭や田畑を残す形に計画を変更しました。

しかし、川辺の料亭や渡しへむかう人馬が、この堤防を越えていくのは大変です。そこで堤防の一部を削って通路をつくり、水位が上昇した時は手で締め切って、水が流れ出るのを防ぐ仕組みの「陸閘(りっこう)」を設置したのです。

これによって、この地区の人々を水害から守り、生活上の不便さも解消する事ができました。



行楽地から住宅地へ

改修工事開始と同じ頃、田園都市会社による新しい高級住宅地"田園都市 (Garden City)"の開発が始まります。

開発は現在の田園調布付近から始まり、多摩川の清流や富士山が見える眺めのよい台地を対象に次々と広げられ、大正の終わりには旧玉川村のすぐ近くにまで及びました。

昭和元(1926)年、玉川村では開発による土地買収に対抗するため、「玉川全円耕地整理事業組合」をつくり、昭和19(1944)年までには、ほとんどの耕地を整然とした地割りに変えます。これはほとんどが村民の力によるもので、農村都市化施策のモデルとなったそうです。

こういった宅地開発に、交通網の発達と関東大震災後の影響が拍車をかけ、都心から多摩川沿いの住宅地へと移り住む人々は急激に増えました。

世田ヶ谷の人口も、大正9年から昭和35年の間に16倍以上にもふくれあがり、すでに昭和初期の航空写真には、料亭と田畑だけだった堤防と川の間にも家々が密集し、まちが形成されている様子が写っています。

渋谷～玉川まで通じていた「玉川電気鉄道」も、大正14(1925)年に渡しに代わって架橋された「二子橋」の上を走って溝口までつながり、かつて"いもと肥料を運ぶだけ"と悪口された郊外電車が通勤ラッシュをみせるようになっていくのです。

より安全で安心できる地域に

昭和40年代、堤防と川の間を洪水から守るために、まちの川側に堤防を築く計画がつけられています。この新堤防ができることによって、洪水時に人の手で陸間を締め切らなくてもよくなります。

現在も新堤防は整備されていませんが、より安全で安心できる地域にするため、様々な問題を一つずつ解決しながら計画を進めています。



江戸の宿場まちから、料亭で鮎料理を楽しんだ行楽地へ、そして一大ベットタウンへと姿を変えた現在、この二子橋の下は、自然や涼を求めてやってくる人々でいっぱいになります。

そしてその傍らに今もあるのが、ここに生活する人々と寄り添ってできた堤防と陸間です。

*1 二子橋水質観測所

・・・この観測所のある位置が、新堤防の整備計画位置です。

*2 煮売り：外食屋、棒屋：鍬や鎌の柄を取り替える職業、湯屋（ゆうや）：銭湯、太物屋：木綿や麻の普段着を扱う店、青物屋：八百屋、経師屋（きょうじや）：屏風やふすまなどの表装をする店、荒物屋：雑貨屋

*3 アミガサ事件

・・・大正3(1914)年9月16日、現在の川崎市幸区や中原区の住民が築堤を求めて、目印のアミガサをかぶり神奈川県庁に大挙して押し寄せた事件。詳しくは『4.有吉堤』をご覧ください。